文房四宝

資料提供
（株）ならや本舗

【第十八回】「製墨業の現状とこれから」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝（筆・墨・硯・紙など）について、基本的な知識を中心に連載しています。これまでは墨の原料や製法など継承されてきた知識をご紹介しました。今回は、その「墨造り」を取り巻く現在の状況と、これからの展望をお話しします。

墨は、「煤」と「膠」という自然素材を主原料に、職人の手で一つずつ丁寧に造られています。しかし、近年では製墨の要である三つの柱（煤・膠・職人）を取り巻く状況にそれぞれ課題が生じています。

◆煤の採煙

■油煙の採取

かつては「灯心に火を灯し、その上に皿をかざして煤を集める」という伝統的な手法で、油煙墨の原料の菜種油や胡麻油など植物性油煙が採取されていました。しかし、約十年前に専門業者が廃業したため、従来の採煙は現在極めて限られたケースを除き、ほぼ行われていません。

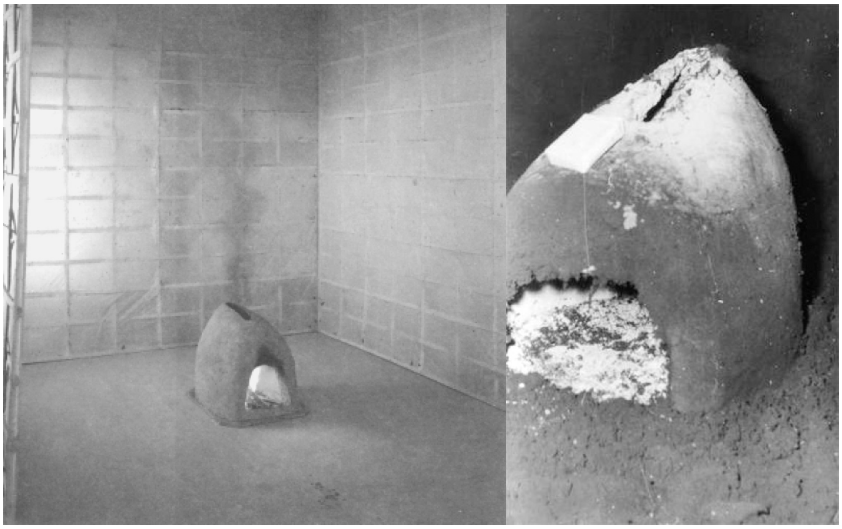
それでも各製墨業者は、今後十年以上にわたり生産可能な量の植物性油煙を確保しているため、直ちに入手が困難になるわけではありませんが、将来を見据えると継続性に不安が残ります。

一方、鉱物性油煙は機械式の採煙装置で採取されており、現在でも安定的な生産は見込めています。しかし、原料であるナフサの精製度（純度）が高くなったため、同じ量を燃やして得られる煤の量が皮肉にも減少してしまうこととなり、価格上昇の可能性が指摘されています。

■松煙の採取

松煙墨の原料である松煙を、伝統的な「室（写真1）」で採煙を行っている業者は現在和歌山県に一軒のみとなっています。その業者も「採算があわないため、自分の代で終わるだろう」と語っています。

そのような中でも、「松煙を絶やしてはならない」という思いから、奈良県の製墨業者がクラウドファンディングを活用して新たに採煙を始めるなど、伝統製法の継承に前向きな動きも見られます。



【写真１】赤松を燃やして松煙を採煙する

松煙は、油煙と同じく各社にはまだ在庫があり、すぐに失われるわけではありませんが、技術継承の試みが始まっている点では油煙と異なり希望があると言えるでしょう。

いずれにせよ、油煙・松煙ともに機械による採煙は可能なため、「煤が完全に採れなくなってしまう」ことはありません。しかし、炎の調整や燃焼状態を職人が見極めることで得られていた、かつての極めて質の高い菜種油煙や胡麻油煙などの煤は、今後ますます入手が難しくなると思われます。

【写真2】職人たちが熟練の手つきで墨を練る

◆膠の生産量の減少

数千年前から伝統的な製法で造られていた高品質な膠も、今では生産量が年々減少しており、その姿が消えつつあります。かつて「三千本膠（牛一頭から約三千本の棒膠が採れる）」ともいわれていた伝統的な製法による膠の国内生産は、すでに終了しました。現在の墨造りでは、精製度の高い和膠や洋膠といった代替生産品を使うことが一般的ですが、従来の膠と性質や品質が異なるため、配合には調整や工夫が必要です。

そのような中で、かつての膠と同等の品質を持つ膠の再生産や、製墨業者である（株）墨運（ぼくうん）堂（どう）による自社生産など、新たな取り組みも見られます。ただし、墨の需要の減少や原料となる皮革製品の供給減など、膠製造を産業として存続させるには厳しい現実があるのです。

◆後継者不足の問題

■墨造り職人の高齢化

墨造り職人は、分業制（練り工・型入れ工・

【写真3】技術の継承には次世代の担い手が不可欠である

乾燥工）で各工程を担当する職人と、全工程を一人でこなす職人に大別されています（**写真2**）。質の高い墨の製造には熟練の職人が必要不可欠ですが、近年では他にもれず、後継者不足による高齢化が問題になっています。身近なところでは、弊社の本家・奈良南松園（ならなんしょうえん）では筆者の従兄弟が墨を造っていますが、後継者が見つからないため、残念ながら本人の代で墨造りが終わる見通しだと聞いています（**写真3**）。

また、労働環境も過酷です。墨造りは11月から翌年3月までの寒冷期に限られ、朝2時から作業が始まり、練（ね）りから型入れ、午後は乾燥（灰替え）という重労働が続きます（**写真4**）。寒冷期以外（オフシーズン）は受注や発送、製品の彩色作業などもありますが、全体の注文量は年々減少傾向のため、墨造りのみで生活を成り立たせるのはますます難しくなっています。

それでも、「墨造りをやってみたい」と思ってくれる若い方が、こうした連載などの情報を通じて現れてくれることに期待しています。

【写真4】墨造りは寒冷期に行われる

■墨型彫刻師

墨造りで用いる墨の型（**写真5**）は、単なる道具ではなく工芸品（**写真6**）とも呼ぶべき存在です。特に、長年その技術を支えたのが墨型彫刻師の中村雅峯（なかむらがほう）氏です。現在はお弟子さんが一人加わり、修行の末、師の名を受けて墨型を彫るまでになりました。しかし、現在この技術を担っているのもこのお二人しかおられません。

【写真5】棒状に延ばした墨を木枠に入れる

◆減少する墨の生産量と今後について

奈良製墨組合加盟業者の墨の生産量は、年間で現在約60万～70万丁（1丁は約15g）ですが、この量は20年前と比べて三分の一以下にまで落ち込んでいます。大幅な減少の背景には子どもの減少、公募展での大作化や、それに伴う大手製墨メーカーの墨液生産へのシフトなどがあります。こうした現象はある意味、製墨業界自らが招いた側面もあるかもしれません。しかし、これ以上の減少をどのように食い止め、希望をつないでいくかが、今後の大きな課題です。

■墨の未来に向けて

近年、日本を訪れた外国人が墨や紙、筆を使った書道体験を通じて、書や水墨画に興味を持ち、実際に墨を購入したり注文したりするケースが増えてきました。今後、「日本の書道文化」がユネスコ無形文化遺産に登録されるようなことがあればそうした関心はさらに高まります。海

【写真７】書道教室でも「墨を磨る」機会は減っている

【写真６】墨型彫刻師の技が光る、芸術的な仕上がり

外市場に向けた販路の拡大や商品開発が進めば、墨の需要は再び上昇する可能性もあります。

しかし、国内の教育現場では「墨を磨（す）る」機会そのものが激減しています。現在、小学校の授業ではプラスチック製の硯と液体墨が使われており、墨を磨る行為を体験できなくなっています。高校で書道を選択しない限り、一生墨を磨らないかもしれない子どもが増えたのは、製墨業界にとって非常に深刻な問題です（**写真７**）。

その一方で、「静かに墨を磨り、心を整えて文字を書く」という時間の価値が少しずつ見直されています。しかし、職人の高齢化や後継者不足が進む中、この文化を懐かしんでいるだけではやがて忘れられてしまうかもしれません。

「墨を守る」ということは、製品としての「墨を残す」ことだけではなく、墨のある時間、墨とともにある暮らし、そしてそこから生まれる心の豊かさを次の世代へと受け継いでいくこと。それこそが、本当の意味で「墨を守る」ということだと考えます。

そのためには、伝統文化を継承し、寄り添いながら、時代に応じた柔軟な発想や新たな価値の創出が求められています。変わりゆく時代の中で、変わらぬ「墨」文化を受け継いでいくために、私たちはその岐路に立っています。

（写真１～５提供：奈良製墨組合）